



使い道のない 言葉たち

東山彰良

ほかの作家さんたちがどういう環境で仕事をしているのかは知らないが、私はかなり乱雑な自室で日々ものを書いていく。

さほど書物が多いわけではないのだけれど、なにせ部屋が狭いので、本棚に入りきらない本はそのへんに積み上げていく。さらに私は執筆中にならず音楽をかけるので、そこそこ場所を取るのがCDだ。空間を有効利用するために数力所に分散して収納し、調節柄よく聴くものはパソコンの横で小山をなしている。足の踏み場もないとはよく言ったもので、積み上げられたこれらの本やCDの山がしょっちゅうなだれを起こす。下手に椅子から立ち上がるうとすれば足元の本がどさっと崩れ、気分転換に音楽を換えようとしただけでCDが反乱を起こす。

この混沌をさらに深めているのが、そ

う、そのへんに散らばったメモ紙だ。

私はよくメモをとる。小説のアイデアが閃いたときだけではない。テレビを観ていて知らない言い回しに出くわせばメモをとり、本を読めば気に入った一文を書き出さずにはいられない。なんの脈絡もなく、気の利いた表現や人生の真理が訪れることだってある。そのようなときに備えて、いつでもメモがとれるように、そこらじゅうにメモ帳を配置している。

が、それではおっつかないことも多々ある。閃きとは流れ星のようなもので、その一瞬を捉えなければ、永遠に私のものから飛び去ってしまう。わかってもらえないだろうか？ 眠れぬ夜に虎のように襲いかかってくる真理は、その場で捕獲してしまわなければ、たちまち小猫になってしまうのだ。

そのようなときは手近にある紙切れをひたたくって、とにかく頭のなかで暴れているものを書き留めておく。広告の裏紙、新聞の切れ端、送付物に添えられた一筆箋の裏。私の仕事机にはそうしたメモ類が散乱している。とくに大切だと思えるものはセロテープで壁に貼ったり、犬が骨を隠すようにマウスパッドの下にくしこんだりする。一度捕まえてしまえば、その閃きや真理はもう私だけのものだ。これでもう逃げられる気遣いはない



ひがしやま・あきら ● 作家。台湾生まれ。9歳のとき日本へ。福岡県在住。西南学院大学大学院経済学研究科修士課程修了。2003年『逃亡作法 TURD ON THE RUN』でデビュー。09年『路傍』で第11回大藪春彦賞受賞。15年『流』で第153回直木三十五賞受賞。16年『罪の終わり』で第11回中央公論文芸賞受賞。17年『僕が殺した人と僕を殺した人』で第34回織田作之助賞、18年には第69回読売文学賞、第3回渡辺淳一文学賞を受賞。

(メモが紛失する気遣いはいつだってあるが)。私は安心してテレビを観たり、本を読んだり、酒を飲んだりすることができる。たとえば、私はこういうことをメモに書きつけている。

〈感情とは、言葉から音と意味を取り除いたあとに残るものだ〉

〈それは新婚旅行中に花嫁を笑われるようなものである〉

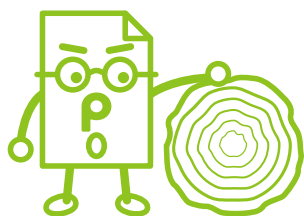
〈この世界は素晴らしいというふりをしたいとき、おれはルイ・アームストロングを聴く〉

今すぐにはなんの使い道もない言葉たちだけれど、何度救われたか知れない。どうか信じてほしい。これらのメモはある特別な瞬間に、まるでずっと昔から決まっていたかのように、私の書く文章のなかに自分たちの居場所を見つけ出す。これでは私の仕事机が乱雑になるのも致し方がない。なんといってもそれが私のやり方なのだし、私の人生の大切な一部分をこの紙切れたちはたしかに担っているのだから。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

無駄なく使うこと、得意です。

古紙のリサイクルだけじゃない。建築用の木材をつくるときに出た残りの部分や古い木材、曲がった木など、木材として使い道が少ないものも紙づくりには利用できる。そうやって、資源を無駄なく大切にしながら、紙はつくられているんです。



有効利用している主な木材

- 製材残材** 建築用の木材をつくるときに出た残りの部分
- 低質材** 細い木、曲がった木など、製材には使えない木材
- 間伐材** 森を育てる過程の手入れとして間引かれた木材

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

次号は11月29日号、南谷真鈴さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo:Shiro Miyake